



ラバウル、最後の生き証人

今月で 倭文 満さん
103歳になる



家の中ではソファの背をつかんで、軽負荷の腕立て伏せ。オリジナル体操の一環だ

今月16日で103歳に
いる。正式に調べてはい
なる大正10年生まれ。青
ないが、自称、「ラバウ
ルの最後の生き証人」だ。
春期は、赤道直下のパ
プルの最後の生き証人だ。
アニューギニア・ニュー
ブリテン島に築かれた軍
事拠点「ラバウル」で約
4年を過ごし、うち約1
年は捕虜生活を送った。
現在は地域の交流
サロンに通い、請われる
と当時の話をしたり、軍
歌や戦前の歌を披露して
わかれた体力のおかげで、

幼少期を過ごした茨城
の水泳教室に兄と共に毎
日通い、柔道・剣道にも
勤しんだ。少年期には野
球に熱中。この時期に培
われた体力のおかげで、
徴兵直後の「刑務所より
に職を得て、関東一円を
転々とした。
56歳で定年退職する
10年に及んだ妻の介護の
ため。手が離れた今は、
再び働きたい気持ちで
いっぱいだ。

昭和17年、ラバウルに
送り込まれ、軍司令部で
主情報収集に関わる任
務に就いた。
ラバウルは、自給自足
活の中で磨いたのが、歌
と踊りだ。下戸ながらも
酒席を盛り上げようと練
作戦を見送った所。そこ
習し、その結果、各地の
戦争体験では、少な
くとも飢えなどには苦し
まずに済んだ。情報収集
に携わっていたため、近
くの島の玉砕や、日本
国内での空爆の激しさな
どは知っていた。戦後も
現地で情報をつかめたた
め、捕虜生活でも、悲観
的にならずに過ごせた。
帰国後は、当時の国鉄
で盛り上がっていたね」

1921年、埼玉県生
れ、西東京市在住。中央大
学在学中に徴兵。帰国後、
複数の企業に勤務。毎朝、
近所の公園まで散歩しオ
リジナルの体操をする規
則正しい生活を送る。

昭和17年、ラバウルに
送り込まれ、軍司令部で
主情報収集に関わる任
務に就いた。
ラバウルは、自給自足
活の中で磨いたのが、歌
と踊りだ。下戸ながらも
酒席を盛り上げようと練
作戦を見送った所。そこ
習し、その結果、各地の
戦争体験では、少な
くとも飢えなどには苦し
まずに済んだ。情報収集
に携わっていたため、近
くの島の玉砕や、日本
国内での空爆の激しさな
どは知っていた。戦後も
現地で情報をつかめたた
め、捕虜生活でも、悲観
的にならずに過ごせた。
帰国後は、当時の国鉄
で盛り上がっていたね」